

レイ・チェン

ヴァイオリン・リサイタル 2022

フリオ・エリザルデ(ピアノ)



Ray Chen

Violin Recital 2022

Julio Elizalde, Piano

2022年11月30日(水) 19:00 開演
東京オペラシティ コンサートホール

7:00p.m., Wednesday, November 30, 2022, at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

共催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団

後援：オーストラリア大使館

協力：ユニバーサル ミュージック



AUSTRALIAN EMBASSY TOKYO
在日オーストラリア大使館

25th
Anniversary
Tokyo Opera City
Concert Hall / Recital Hall

Program

ベートーヴェン: ヴァイオリン・ソナタ 第8番 ト長調 Op.30

Beethoven: Violin Sonata No. 8 in G major Op.30

第1楽章: アレグロ・アッサイ	1 st Mov.: Allegro assai
第2楽章: テンポ・ディ・メヌエット、 マ・モルト・モデラート・エ・グラツィオーゾ	2 nd Mov.: Tempo di minuetto, ma molto moderato e grazioso
第3楽章: アレグロ・ヴィヴァーチェ	3 rd Mov.: Allegro vivace

ストラヴィンスキー(ドゥシキン編): バレエ音楽「妖精の口づけ」より ディヴェルティメント

Stravinsky (arr. Dushkin): Divertimento, Suite from The Fairy's Kiss

I. シンフォニア	II. スイスの踊り	III. スケルツォ	IV. パ・ド・ドゥ
I. Sinfonia	II. Danses Suisses	III. Scherzo	IV. Pas de deux

* * * * *

J.S.バッハ: 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番 ホ長調 BWV1006

J.S. Bach: Partita No.3 in E major for Solo Violin, BWV 1006

I. 前奏曲	II. ルール	III. ロンド風のガヴォット	IV. メヌエットI,II	V. ブーレー	VI. ジーグ
I. Preludio	II. Loure	III. Gavotte en Rondeau	IV. Menuett I,II	V. Bourrée	VI. Gigue

ブラームス: ハンガリー舞曲 第7番(ヨアヒム編) / 第17番(クライスラー編)

Brahms: Hungarian Dance No.7 (arr. Joachim) / No.17 (arr. Kreisler)

サラサーテ: ツイゴイネルワイゼン Op.20

Sarasate: Zigeunerweisen Op. 20

第1部: モデラート — レント	I: Moderato - Lento
第2部: ウン・ポーコ・ピウ・レント	II: Un poco più lento
第3部: アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ	III: Allegro molto vivace

[2022年 日本公演スケジュール]

11/23 [東京] サントリーホール *	主催: NHK交響楽団
11/24 [東京] サントリーホール *	主催: NHK交響楽団
11/26 [大阪] NHK大阪ホール *	主催: NHK大阪放送局 / NHK交響楽団
11/27 [福岡] 福岡シンフォニーホール *	主催: 公益財団アクロス福岡、「福岡・音楽の秋」実行委員会
11/30 [東京] 東京オペラシティ コンサートホール	主催: ジャパン・アーツ 共催: 公益財団東京オペラシティ文化財団

* NHK交響楽団との共演

Profile



©John Mac

レイ・チェン(ヴァイオリン) Ray Chen, Violin

21世紀のクラシック音楽家の定義を変えるヴァイオリニスト。クラシック・ファンに影響力のあるメディアに登場し、過去に例をみないほど多数のオンライン・フォロワーを持っている。その素晴らしい音楽性は、何百万人もの人々とネットで繋がることによって、また、世界の著名なホールでの演奏会によって世界中の聴衆へと届けられている。

台湾生まれ、オーストラリア育ち。15歳の時にカーティス音楽院同音楽院に入学後、アーロン・ロザンドに師事する。国際ヤング・コンサート・アーティストで優勝し、その支援も受けた。2008年メニューイン国際コンクール、翌年のエリザベート王妃国際コンクールでの優勝をきっかけに注目を

浴び始め、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、および出身国オーストラリアで、演奏会と録音の両分野にわたってキャリアを築いている。

2017年にはデッカ・クラシックスと専属契約を結び、直近では、ロンドン・フィルとの共演により、3枚のアルバムをソニーからリリースした。これらはいずれも批評家から賞賛されたが、このうちの1枚目「ヴィルトゥオーゾ」は、エコー・クラシック賞を受賞した。

ストラッド誌とグラモフォン誌で「注目すべきアーティスト」として紹介された他、フォーブス誌では「最も影響力のある30歳未満のアジア人30人」にも選ばれた。また、ジョルジオ・アルマーニとは、複数年におよぶパートナーシップの下に活動を共にした。(アルマーニは、エッセンバッハとの共演でリリースしたアルバムのカバーをデザイン)さらに、バリ祭やノーベル賞記念コンサート、BBCプロムスといった主要なイベントにも出演している。

これまでに、オーケストラとは、ロンドン・フィル、ロンドン響、ゲヴァントハウス管、ミュンヘン・フィル、スカラ座フィル、聖チェチーリア管、ロサンゼルス・フィル、南西ドイツ放送響、サンフランシスコ響、ピッツバーグ響、ベルリン放送響、バイエルン放送響などと、また、指揮者では、シャイー、ユロフスキ、オラモ、ホーネック、ペトレンコ、ウルバンスキ、ヴァルチュハなどと共演している。2012-15年に、ドルトムント・コンツェルトハウスのレジデントを、2017/18シーズンは、ベルリン放送響の「アーティスト・フォーカス」の一人となった。

音楽教育に対しても非常に献身的で、音楽とコメディを融合させたビデオ・シリーズを制作し、自身よりさらに若い世代の音楽を志す学生たちの教育に役立っている。また、出演する演奏会はオンラインで宣伝広告を行うことにより、毎回完売し、演奏会場に全く新しい客層を呼び込んでいる。現在は、自身のデザインしたヴァイオリン・ケースを、楽器メーカーGEWA社から販売しているなど、様々な取り組みを自ら行っている。

使用楽器は、1714年製ストラディヴァリウス「ドルフィン」を日本音楽財団から貸与されている。

Profile



© Amanda Westcott

フリオ・エリザルデ (ピアノ) Julio Elizalde, Piano

ソリスト、室内楽奏者、アーティスティック・アドミニストレーター、教育者、そしてキュレーターなど、多方面にわたるキャリアを展開している。

サンフランシスコのベイ・エリア出身。サンフランシスコ音楽院でポール・ハーシュに師事し、優等学位を授与された後、ニューヨークのジュリアード音楽院にて修士号、博士号を取得、ジェローム・ローエンタール、ヨゼフ・カリクシュタイン、ロバート・マクドナルドの各氏に師事した。

アメリカ、ヨーロッパ、アジア、ラテン・アメリカの主要な舞台に出演し、聴衆の人気と高い評価を得ている。2014年

以来、シアトル近郊のオリンピック音楽祭の芸術監督を務めている。

世界をリードするアーティストたちと多くの共演を重ねている。ヴァイオリニストでは、サラ・チャン、レイ・チェン、パメラ・フランクなどと、また、指揮者では、イツァーク・パールマン、テディ・エイブラムス、アン・マンソンなどと共演している。また、作曲家のオズバルド・ゴリホフ、ステイヴン・ハフ、バリトンのウィリアム・シャープ、そしてジュリアードやクリーヴランド、タカーチ、クロノス、ブレンターノなどの弦楽四重奏団とも共演している。

モントリオール交響楽団のコンサートマスターであるアンドリュー・ワンと、ニューヨーク・フィルのチェリストであるパトリック・リーとともに、ニュー・トリオを創設。フィショフ及びコールマン・ナショナル室内楽コンクールで優勝。ハーヴァード音楽協会の権威あるアーサー・W・フット賞を受賞。ニュー・トリオの一員として、ビル・クリントン元大統領や、ライスとキッシンジャー国務長官、そして亡くなったマサチューセッツ州のテッド・ケネディ上院議員など、アメリカの政治家たちのために演奏を行った。また、2013年の映画『Jimmy P』(邦題『ジミーとジョルジュ 心の欠片を探して』)のアカデミー賞受賞作曲家、ハワード・ショアによるサウンドトラックの演奏を手掛けた。

教育者としても、情熱的な活動を展開している。2013年にはワシントン州タコマのビュージェット・サウンド大学へ客員教授として訪れ、アメリカの主要な音楽院や大学にてピアノと室内楽のマスタークラスを開催している。また、イエロー・バーン、タオス、カラムーア、ボウディンなど、多数の夏の音楽祭や、ウェスト音楽アカデミーなどに出演。2012年には、インディアナ州、サウス・ベンドのノートルダム大学で開催されたフィショフ・ナショナル室内楽コンクールの最年少審査員に選ばれた。

Program Notes

柴田 克彦 (音楽評論家)

ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第8番 ト長調 Op.30

古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が残した10曲のヴァイオリン・ソナタの内9曲は、比較的初期の1798-1803年に集中して完成された。本作は、1801-02年に作曲されたOp.30の3曲のソナタ(第6-8番)中の1曲。同セットはロシア皇帝アレクサンドル1世に献呈されているが、初演等の経緯は判明していない。なお1802年は、耳の病が深刻化しながらも、交響曲第2番等を完成させた上昇期にあたる。Op.30の3曲は性格分けが明確に成されており、第8番は明朗でくつろいだ趣の佳品。しばしば田園的とも形容される。

- 第1楽章： アレグロ・アッサイ。冒頭の素早い動きが印象的。終始リズムカルに運ばれるが、二短調の第2主題が若干の緊張感をもたらす。
- 第2楽章： テンポ・ディ・メヌエット、マ・モルト・モデラート・エ・グラツィオーソ。緩徐楽章とメヌエットの要素を兼ね備えた楽章。優しげな旋律が流麗に歌われていく。
- 第3楽章： アレグロ・ヴィヴァーチェ。16音符が軽やかに連なる常動曲風のフィナーレ。

ストラヴィンスキー (ドッシキン編)：バレエ音楽「妖精の口づけ」より ディヴェルティメント

「妖精の口づけ」は、20世紀ロシアの大家イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882-1971)が、舞踊家イダ・ルビンシテインの委嘱によって、1928年に作曲したバレエ音楽。アンデルセンの「氷姫(雪の妖精)」に基づく物語で、音楽にはチャイコフスキーの歌曲やピアノ曲の旋律が用いられている。

「ディヴェルティメント」は、1931-34年にその音楽から編まれた管弦楽用の組曲。それを同時期に、ストラヴィンスキーと深い交友関係にあったヴァイオリン奏者ドッシキンが、ヴァイオリン&ピアノ用に編曲した(作曲家との共同編曲ともいわれる)のが本作である。

曲は、作曲者の新古典主義時代の作品らしく、明快でシンプルにしてモダンな音楽。以下の4部分からなっている(「 」内は該当する場面)。

- I. シンフォニア：「妖精によって母親と離れ離れになった子供に、妖精が運命の口づけを与え、子供は農民に救われる」。流麗な旋律が奏された後、快速調で進行し、さらにテンポを上げて盛り上がる。そのまま次の部分に移る。
- II. スイスの踊り：「村人たちの踊り。子供は若者に成長し、踊りの輪の中にいるが、そこに妖精が現れる」。快活なフレーズを中心に進行。変則的なアクセントが特徴的だ。
- III. スケルツォ：「若者の恋人とその友人たちが踊る」。リズムカルだが動きの幅が大きく、若干ユーモラスな旋律も混じる。
- IV. パ・ド・ドゥ：「若者はペールをかぶった妖精と踊り、恋人と間違えて愛を告げると、妖精は再び若者に運命の口づけを与え、雪の王国へと連れ去る」。ロマンティックな音楽から、歯切れの良い音楽に移り、躍動的なコーダに至る。

J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番 ホ長調 BWV1006

ドイツ・バロック音楽の巨匠ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)が残した「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ&パルティータ」全6作の最後を飾る作品。1720年に浄書譜が書かれた(正確な経緯は不明)同曲集は、重音や分散和音が駆使された重層的かつ深遠な音楽で、不滅の傑作と称されている。曲集は、各3曲のソナタとパルティータが交互に配置されており、その内パルティータ(多楽章構成による組曲風の楽曲)は、同じ調性の舞曲が連なる「フランス風組曲」の形で書かれている。

第3番は、第1.2番が短調であるのに対して、長調の6曲からなる明るく開放的な作品。前奏曲を加えて、第1、2番より舞曲を多く用いた構成も特徴的だ。なお本作は、バッハ自身が編曲や他の作品への転用を行っているほか、様々な編曲がなされている。

- I. 前奏曲：華やかで快活な音楽。エコー効果が用いられている。
- II. ルール：フランス由来の田園的な舞曲。穏やかな音楽が続き、付点リズムと重音が多用される。
- III. ロンド風のガヴォット：以下3曲もフランス由来の典雅な舞曲。単独でも有名なこの曲は、愛らしい主題が5回登場する間に、多様なエピソードが挟まれる。
- IV. メヌエットI、II：優雅な第1メヌエットに、より流麗な第2メヌエットが挟まれる。
- V. ブレー：活発な短い1曲。
- VI. ジーク：快速調のイギリス舞曲。16分音符を主体にした明るく軽快な締めくり。

ブラームス：ハンガリー舞曲 第7番 (ヨアヒム編) / 第17番 (クライスラー編)

ドイツ・ロマン派の大家ヨハネス・ブラームス(1833-97)の「ハンガリー舞曲集」全21曲は、1869年と80年に出版されて大ヒットしたピアノ連弾曲集。若い頃共演したハンガリー出身のヴァイオリニスト、レマーニヤジブシーの楽団から吸収したハンガリーの民俗的な音楽を、ブラームス流にリメイクした作品集である。

本曲集は管弦楽ほか様々な編曲で親しまれており、ヴァイオリン版での演奏機会も多い。ここでは、ブラームスの盟友ヨアヒムの編曲による第7番(アレグレット)と、ウィーン出身の大ヴァイオリニスト&作曲家クライスラーの編曲による第17番(アンダンティーノ)が演奏される。前者は軽快に弾む明るいナンバー。後者は、哀感を湛えた2つの旋律と、民俗的で激しい旋律が交替する。

サラサーテ：ツイゴイネルワイゼン Op.20

パブロ・デ・サラサーテ(1844-1908)は、スペイン生まれのヴァイオリニスト&作曲家。歴史的な名奏者だった彼は、自身が弾くための小品を数多く残した。その代表曲が1878年に出版された本作。ドイツ語で「ジブシーの歌」を意味するタイトル通りの野趣と哀感に充ちた音楽で、以下の3部分が続けて演奏される。

- 第1部：モデラート—レント。憂いに充ちた旋律が、技巧的な動きを交えながら、たつぷりと奏される。
- 第2部：ウン・ポーコ・ビウ・レント。甘く切ない旋律がしっとりとして歌われる。
- 第3部：アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。速弾きが耳を奪う情熱的な終結部。